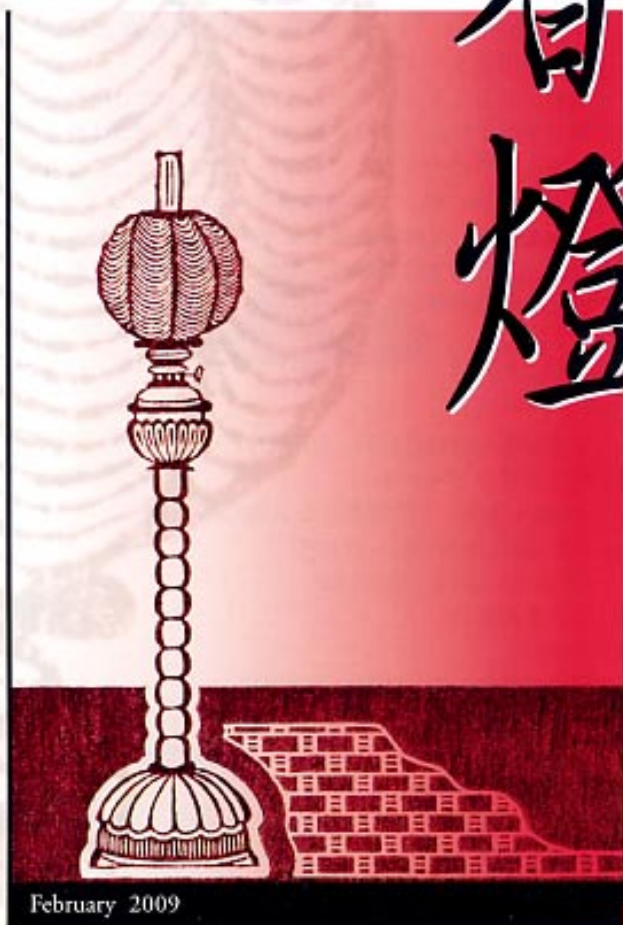


春燈



February 2009

2

久保田万太郎の句

いつ濡れし松の根方ぞ春しぐれ

句集『流寓抄』昭和三十三年

思索に疲れふと目をあげれば、いつの間に降ったのであろうか、春の時雨が松の根方を濡らしていた。

「いつ濡れし」の上五の措辞に、そこはかとなき人生の孤独感、俳句の生命と言われる余情が滲む。

前掲の句に芝居的一幕を見る。「この場面より幕開け、ここで幕切れの方が」と想像をめぐらす。十七音の作り出す世界の広がり大きさと深さを学んだ

太田慶子

久保田万太郎の句

周総理小春の眉の濃かりけり

「春燈」昭和三十一年

半世紀以上も前のこと、当時のマス・メディアにのる故周恩来総理の眉毛の濃さに驚嘆したものだ、俳句に無知な若者にとつて、このことが俳句に詠まれるということなど思いもよらなかった。その後勉強を重ねる中、先師櫻桃子編の『こでまり抄』の中に掲句を見つけ、改めて俳句固有の本質と方法を目の当たりにすることができた感動が、俳句開眼への端緒を開くことになった。

生 方 義 紹

主宰の句

安立公彦

くり返す自問ひとつや冬暁

短日のやまひ加齢は分つべし

木枯を真夜聞く旅の寝覚めかな

惜年の大河は流すもの多し

いまさらに敦はとほし帰り花



蕪汁

久米憲子

夫在らば結婚記念日文化の日
風船葛ふくらみ切れず萎えにけり
残る虫一夜ひとよと鳴き継げり
表札に愛犬の名や冬うらら
葱大根育つ赤塚散歩圏
綿虫や文殊菩薩の髪ゆたか
水仙花俯き癖は我にもまた
真つ向に秩父連山冬夕焼
冬至梅仏の夫に見せにけり
七階の暮しにも慣れ蕪汁

墓地日和

岩井泉樹

扁額の大書の寺号冬帽子
冬ぬくし右手が「ぱあ」の仁王像
猫・鴉・鳩・老人や冬日向
迫真の説法像や冬木立
山茶花や露伴幸田成行墓
歴代の仁左衛門墓や柿落葉
溝口・花柳並びたる墓碑冬ざくら
笹鳴や大家の墓所の名刺受け
それぞれの墓石の家紋山眠る
短日やくの字に下る女坂

当月集

安立 公彦選



○ 北岸 邸子

木枯や誰も渡らぬ歩道橋

話相手欲しくて仰ぐ返り花

些事ひとつ明日へまはせり懐手

転居して日々を大事に根深汁

恙ゆ糸の下戸を通せり木の葉髪

○ 吉川 隆

寒鴉かの日の雨を語り継ぐ (神宮外苑)

冬紅葉鴉の影の濃かりけり

映像の F I N の字幕冬木道

落葉して天に梢の残りけり

さうかうをするうち時雨上りけり

○ 中上 馥子

悴みて草城句碑に佇めり

住み古りし庭の山茶花日和かな

風花やマンモグラフィー検診車

金鏢に茶を濃く点てよ漱石忌

松籟の騒ぐ古墳や草紅葉

○ 豊谷 青峰

冬麗や大樹の影に師を思ふ (花柳宗岳先生一周忌)

冬の日や塔にかぶさる山の影

時雨るるや櫛目の粗きお六櫛

道の駅積み上げて売る蕪の高

松島の一景なるや時雨舟

○ 三代川 玲子

あるいは朱し名もなき草の枯野道

枯蟻螂いのちなければ手にのせて

雲染めて小春のひと日終りけり

白障子風呂に入ると祖母のこゑ

眼裏にわが血の赤し日向ぼこ

春燈の句

安立 公彦選

寒灯や一座を占むる老いの席

東京 吉田とよ子

願ひごと一つを胸に冬の虹

洗心の音の時雨となりにけり

読み継ぎし一書や冴ゆる午前四時

顔見世や鬢に残る紙の雪

埼玉 大文字孝一

旅先の地酒に酔ひて時雨かな

予定なき旅のひと日や冬茜

再会はありえぬ別れ冬紅葉

凧や寛次郎窯に火の気無く

二畳間は黙考の部屋花八手

対岸の三階茶屋の白障子

賀茂川の水透き通る枯野かな

東京 佐藤 博重

世間より己を隠す秋日傘

神奈川 葦原 葭切

檻樓市のコートそのまま着て帰る

冬うらら海はアメリカまで続く

ぼつねんと野中の地藏冬の蝶

日記買ふただそれだけで愉しかり

東京 河村紀美子

献立を考へてゐる日向ぼこ

冬木立こころ寂しうなりにけり

マンシヨンのたつた二枚の障子張る

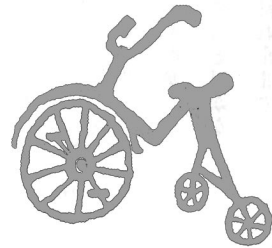
点描の街となりゆく夜の雪

淋しさに落葉の山を崩しけり

島陰の港灯れる寒さかな

舞ひ上がる落葉をさそふ風の道

神奈川 駒野目信之



余言

安立公彦

冬の日や塔にかぶさる山の影

豊谷 青峰

端正な句だ。この作者には旅の句が多い。この句もそういう旅の途次ふと見かけた景かも知れない。「塔にかぶさる」が一句の背景をよく写している。「冬の日や」という上五の納まりもいい。

私たちは句を作るとき、対象のどこに焦点を当てようかと思索する。しかし対象を見つめてみると、その対象と自分の心に、通い合う思いが生じて来るのを感じる。図式にすると、凝視↓交感↓言葉、となるうか。もつと詰めると「描写」となる。この句もそういう描写の句である。

枯蠓螂いのちなければ手にのせて

三代川玲子

冬期の昆虫類には、冬の蝶・冬の蜂・冬の蝗などのように、

「冬の」を冠した季語が多い。そういう中で蠓螂だけは「枯」を戴いている。これは蠓螂への尊称である、と言つても良い。作者は今、その枯蠓螂を掌にのせている。今にも前肢の鎌をふり上げそうな蠓螂だ。しかし当然のことながらその昆虫はうごかない。「いのちなければ」の中に、枯蠓螂への深い思いが読みとれる。

悴みて草城句碑に佇めり

中上 馥子

去る十一月末日、請じられて阪神句会を訪れた。各地区句会の窓口である三上程子さんと一緒だった。句会は大阪・京都・兵庫・岡山・香川の各地から約五十名の参加者があって盛会だった。中島和昭さん、西川保子さん、上野昌子さんとも久しぶりにお会い出来た。

日野草城は「春燈」と言うより安住敦と深い関わりがある。二十歳で「ホトトギス」の巻頭を占めた草城は、昭和十年三十四歳の時「旗艦」の主宰となる。「旗艦」は新興俳句運動の一拠点となり、草城は翌年「ホトトギス」同人を除籍される。戦後昭和二十四年に「青玄」を創刊、主宰となるが、七年後の昭和三十一年一月、五十四歳で死去。

昭和十五年刊行された安住敦の第一句集『まつしき饗宴』

の序文の中で草城はこの愛弟子に、「敦でなければ歩けない道、まったく彼一人にのみ賦与された独自の道を彼は歩いて来た。これからの道も恐らく彼独得の道に違ひないと思

ふが、今までの道の延長であらうか、それとも全然異った方向へ転換された道であらうか。」と書いている。いみじくも戦後の敦の辿る道を予言しているかのようだ。

句会の席で隣り合った中島和昭さんの話では、この句碑は、和昭さんのところからも、作者のところからも近い「服部緑地公園」の一隅に、五句連記で建てられているのとことだった。その内の二句を記す。

春暁やひとこそ知らね木々の雨
見えぬ眼の方の眼鏡の玉も拭く

前句は『花水』、後句は『人生の午後』に収録されている。この『人生の午後』には、へ高熱の鶴青空に漂へりへ切干やいのちの限り妻の恩へなど、愛唱措く能わざる句も多い。ただ、草城の俳句に対する万太郎と敦の見解は大きく隔っていた。

日野草城は最晩年の住いを「日光草舎」と称していたが、この句碑の建つ公園は「日光草舎」に近いのではなからうか、とこれは帰宅してから思ったことだった。

作品に戻る。この句の中で「草城句碑」は多くのことを語りかけている。それを作者は「悴みて」という季語で具体化している。勿論、句碑が語りかける多くの思いの一端にすぎないが、それでもこの季語と「草城句碑」はみごと

に調和している。この一句を知ったことは喜びだった。

朦朧のまぼろし見しや冬の濤
劔持 信夫

「朦朧」（もうどう）とは聞きなれない言葉だ。辞書を引くと中国の史書『南史』に記載されている「いくさ船」とある。十八世紀に編纂されたもの。

俳句に使う言葉は、中学生が教わる語学で充分だという説がある。一理ある説だ。反面、特異な言葉を使っても、その言葉が一句の内容と強く結びついているのであれば、使用価値は充分にある。

この句の「朦朧」は、「まぼろし見しや」と不離の関係にある。濤高い冬の海に、折からの濃霧について現れた「朦朧」は、さながら戦艦大和を間近に見た驚きと同じだろう。しかしそれは幻だったとしている。

一句良く一編の物語りを呈する一つの例句と言えよう。

寒灯や一座を占むる老いの席
吉田とよ子

かつて私たちの日常にはこういう不文律のような決まりがあった。長幼序ありの生活があった。作者は八十四歳。作者の日常は、今もこの句の通りなのだろう。へ読み継ぎし一書や冴ゆる午前四時へ。それぞれの句に凜とした作者の姿勢が感じられる。こういう前向きな姿勢こそ、これからの俳句に欠かせない要素である。